

## ヘンリー・アダムズの日本旅行（再論）

樋 口 日 出 雄

### I

明治19年に来朝したアメリカ人歴史家ヘンリー・アダムズが三ヶ月を費して見学した欧化途上の日本は、彼の友人に宛てた手紙の中に写し出されている。後年、自伝作者ともなるこの歴史家は、日本旅行中の私信に自伝的な記録を折り込むことをしなかった。気心の知れた友人にとっては、そういった行為は蛇足に過ぎないという事情もあったに違いない。我々としては、しかし、日本上陸時までの彼の履歴書を作成しておこう。まず血統だが、二代にわたって大統領を送り出した名門中の名門、本籍地ボストン近郊クウィンジー。学歴はハーヴァード大学を1858(安政5)年に卒業。あたかも日米間に修好通商条約の成った年である。次に職歴だが、南北戦争中はロンドンで父親（駐英アメリカ公使）のもとで公使館員を務め、ワシントンに帰ってジャーナリズムに身を投じたのち、1870年より八年間ハーヴァードで中世史とアメリカ史の助教授を務めた。現在時では教職を辞し、『合衆国史』編集中。賞罰なし。年齢48歳。日本という極東の島国へ身を寄せたのは、前年の夫人の自殺が最大の原因である。

七月初頭、コレラ流行中に横浜に上陸したアダムズと画家のジョン・ラファージは、汽車の他に人力車という便利な交通手段のあることを知る。炎天の市街、鉄道のステーションなどが印象深い風景であった。京浜間を往復しながら日本の第一印象を蓄えてゆく。東京周辺には徳川幕政から明治初年にかけて堀割河の歴史がある。逆にいえば、それほど湿潤な地方で

ある。アダムズ一行の日光参詣は低湿地から高原地方へのがれ、コレラに感染する危険を一掃する目的があった。

この期間に、アダムズの血縁で親日家のビゲローと日本政府に仕え、美術行政の顧問格のフェノロサに先導されて美術工芸品の収集に巡回する。ビゲローのハーヴァード時代の同窓にヘンリー・カボッド・ロッジがおり、ロッジはヘンリー・アダムズ教授の歴史講座に列席していた一人であった。ビゲローも医学部で細菌学を納め、同学部 外科助手を一時務めたが、健康を害し医業を断念した。フィラデルフィア万博以来あこがれていた日本に渡る機会をうかがっていたが、1882（明治15）年、一時帰米したお雇い外人教師のモースの講演に感動してモースに同行して来日したのである。1883（明治16）年9月30日付のビゲローからロッジに宛てた手紙に日本の骨董業界のマーケットに言い及んだものがある――

1868年の維新以来、価値ある古美術品が大量に市場に出たのは、二つの原因による。第一は経済的に逼迫した貴族貴紳が値段の見境なく売り出したこと、第二は日本人の間に突発する外国崇拜マニアである。当時は至る所でビーヴァー皮帽子を金時絵函と交換することができた。勿論外国人が買い占めた。二年前に漆器は殆ど姿を消してしまった。それ以来は二、三倍にはね上った。磁器や青銅の良い物がこれに続いたが、四、五年前迄絵画は安定し、高かった。そこへフェノロサが現われてブームを起した。

（村形明子「ビゲロー略伝」、古美術三五号）―(1)

フェノロサもモースの縁で来日した一人の親日家である。ビゲローの富が先に来日していたフェノロサの鑑識眼と結び付いて、二人の精力的な日本美術の発掘が開始された。フェノロサの武器は進化論で「万物ノ状勢ヲ解釈スルモノ概ネ進化説ヲ以テ正鵠トセザルハナシ」（新井由三郎「美術

新論」）といわれた時代であった。

ビゲローの財政的援助でフェノロサが美術鑑定の会「鑑画会」を起こすのが明治17年、翌18年には規約ができています。この会の出品画は殆ど二人のコレクションであった。暑中は休会にする不文律があり、アダムズとラファージが横浜に上陸することを知ったときは、二人は日光の避暑先から上京してきたことになる。アダムズの手紙にうかがえる次の文句――

To John Hay

Yokohama, 9 July, 1886

We have been here a week. ... Amusing it certainly is —— beyond an idea —— but comfortable or easy it is not by any means —— and I can honestly say that one works for what one gets. ——(2)

は途中でコレラから退散もせず、一週間を費し東京近郊をかけ回った一行の精力的な収集ぶりを思わせる美術品マニヤの言である。

## II

東京の外郭にあって東北・北越地方へ至る幹線通路をわずかに外れた日光と、それをとりまく台地は、温泉の利点も加わって、閑静な保養地として最適であった。アダムズも水浴をした中善寺湖や湖畔の湯元温泉では、アダムズのいわゆる「真の日本」を印象づける風景風俗に対面できた。

ヘンリー・アダムズの日本知識の大半はロンドンにあるマレー書店の刊行になる「旅行案内叢書」の日本篇に依拠したのであるが、日光に日本風の家を借り受けると、遠近の各地に関心が及んで、男体山の山麓で白装束の巡礼道中に出会ったり、夜間、蚊退治の炬火をたく風習を見物するなど

多くの新発見を交じているのである。

As night came on, bonfires smoked, to keep away mosquitoes, and, by the shade of Yeyas, they were not built without reason. — (3)

人口の密ならざる村落に関しては、アダムズの筆は生活技術誌または有形文化誌の趣きを帯び始める。蚊退治の炬火などは、その生活技術誌的側面を遺憾なく表示するものであろう。客足をコレラに奪われた日本の美術品販売業者は、日光まで使者を立てて商品を送りこんだ。荷が届いてみると、運搬係に「キン」と「ヘイ」が揃っているのが、アダムズにとって無類の痛快事であった。キング (King) とヘイ (Hay) は本国に残した彼の友人たちの名であった。

日光は神経質な煩雑さの無い点で、アダムズの氣にいった。維新のどさくさは了えたというものの、都市では自由民権を唱える政治青年の街路にたむろする十年代の末であった。前年末に夫人を失った暗さと寂寥を胸に秘めていればこそ、国境を越えて辿り着いた日本で、彼は一時の平安を望んでいたであろう。日光山内の二社一寺を観たあとでも、アダムズの印象は次のタウト (昭和初期来日のドイツ人建築家) の印象——

〔日光の〕絢爛たる建物は、環境がどんなに美しくとも、それだけにますます不快な感じをあたえる。規模の均整は殆ど製図版上の図でもみるように凝固してしまっていて、遊覧案内書の中で日本最大の観物と讃えられているものは、実は日本文化の大敗北である。—— (4)

——と殆ど選ぶところのない結果となった。日光体験は、アダムズとラファージにとって、日本旅行中の一大転機となっているが、それは徳川期

の芸術に対しての開眼といってよい。徳川時代の町絵師北斎の浮世絵版画を知ったのである。ここで粗削な比論が許されるなら、山の斜面に沿って「製図版上」の図の如くバロック風建築の屹立する祭式の空間では流露しなかったアダムズ的情感は、浮世絵風の隈取の生活空間に触れると、日照りにほだされたように流出するのである。

タウトによって日本文化の大敗北と目される日光の二社一寺を山腹に配した構図は、地上の世界から天上の浄福境へ救いあげる目的で建てられた。同じ目的で建てられたキリスト教徒の中世寺院のシンメトリの美学を規準にすれば、異端であることは明白である。アダムズは「漆塗りのピラミッド」という文句で形容したが、ピラミッドにシンメトリの美的観照がないように、この仏教徒の塔はアダムズに内的に働きかける要素に欠けていたのである。浮世絵はこの点でシンメトリカルな美的効果を発揮する風物を写実の対象とする。富士という山岳も日本の風土にシンメトリカルな美的効果を提供している有形文化財のひとつと見做されるのである。北斎の有名な波濤と富岳の対照を狙った構図も、他の効果を奏しているとは言い難い。

アダムズにとって反立対峙のシンメトリとは、狂気と仮借ない明晰性、安逸と死の意識、実証主義思想とロマン的情念というダイナミズムで図式化することもできる。アダムズの日光滞在の期間を括って、シンメトリカルなダイナミズムの顕在化される場として、この図式に配備することも可能であろう。8月10日付の手紙の末尾には「もし帰りの船が沈没して跡形もなくなるときがやってくれば、あらためて船上に正座して実生活の味を学んでやろう」と記されている。礎稿（「ヘンリー・アダムズの日本旅行」を指す——）においては、この言明を「美しいアナクロニズム」と規定したが、今や我々はその内実を狂気による粉飾と、明晰な自己解析との緋ひ交ぜという姿で思い描くことができよう。社会諷刺をたたえた皮肉を放ちながら、他方でその社会に限りない郷愁を覚えるといったアンビバレン

トな心情が彼の本心なのである。

### Ⅲ

二双のピラミッドともいうべきシンメトリを成すアダムズの内心を解き明かす鍵は、再び彼の書簡中に求める他はない。しかしここでいささかの迂遠を覚悟して年譜を介入させよう。この部分はアダムズ自身の自伝的回想に欠落しているため、文明史の事項も容れて敢て年譜を組んだ。

文学事項		参考事項
グラント	1871	ヘイ『バイク・カウンティ・バラッド』(詩)
	72	キング『マウイティニアリング・イン・ザ・シェラ・ネバダ』(散)
	73	
グラント		
	77	
ヘイズ		79 グラント来日
ガーフィールド (暗殺)	=80	ヘンリー『デモクラシー』(小)
アーサー	81	
	83	ヘイ『ブレッド・ウイナーズ』(小)
	84	ヘンリー『エスター』(小)
クラブランド	85	85—86 グラント『自伝的回想録』
	89	86 ヘンリー—日本旅行
ハリソン	90	89—91 ヘンリー『合衆国史』九卷
	92	92 アダムズ家財政逼迫

彼の周辺では一群の文学者が集い、詩が生まれ、小説が書かれ、散文が編まれていたのである。アダムズが外部への橋を切り落すように、71年より92年に至る時代の記録を、自伝の領域外に置いたことは、あるいは晩年

に無数の灯となって展開していたかもしれないある探究の糸口を、みずからの手で切り落したこともあった。彼の中年から晩年にかけて実行された精神の多岐にわたる探究は、彼の祖父の時代と中世（ヨーロッパ中世）とを両極に据えていた。すなわち前者の探究が『合衆国史』九巻であり、後者の探究が中世聖堂の研究『モンサンミシェルとシャルトル』である。無数の灯となり展開が期待された領域とは、アダムズの生が否応なく領有され、押し潰され、血を流す同時代の実生活の場であった。

アダムズのかち得た同時代研究の成果としては、当時の世相と複雑に絡み合っていた西部地方の開発事業に連帯したことがある。中世と祖父の時代を両極に据えて、70年代に教壇から守備範囲を段階的に拡大しつつあったアダムズは、同時代的に進行していた新政策を身近に招請した。70年、アメリカ政府は「北緯40度調査」の方針を決定して、ロッキー山脈沿いの西部各地に有能な人材を投入した。キングの著作はそのような時流に棹さすものであった。アダムズの友人で地質学者のヘイグはイエロー・ストーン公園を調査した。88年にはアメリカ民俗学会が発足している。これをアダムズの思想の地平で照らし合わせるなら、アングロ・サクソン族の精神構造の理解から異教世界のフィールド調査への転向である。

日本というフィールドをあたえられて、アダムズはラフアージを援軍としてフェノロサやビゲローの権威に挑んだ。フェノロサの多忙はアダムズの書簡中にも仄聞されるが、この売れっ子の進化論者の画論に頭から冷水を浴びせたのがアダムズとラフアージであった。北斎の欠点は、フェノロサによれば写生に走って画道の本領から遠ざかったというのである。アダムズは彼の画業にシンメトリカルなデザイン的美を発見していた。シンメトリという見地ひとつを採り上げても、フィールドを実地に探ぐれば、美的価値の判別を弁えているアダムズの強味がある。アダムズが描いたタヒチ島の水彩画などを検分すると、彼に絵心があるとは断言できないが、物事の境界を見定める心眼があるとはいえそうである。ベネディクト流に

「菊」と「刃」で日本人の精神構造を切ってみせる手並みよりも、仏教の安逸 (high old joke) と無常観 (the contemplation of the infinite) を同時進行的にシンメトリカルに語るアダムズに日本文化のより深い理解者を発見できる思いがする。

#### IV

日本旅行の後半で、アダムズやラファージが東洋文化の正統を中国大陸に求めたのは、二人の共通の友人ラファエル・パンペリーの影響があるのかもしれない。パンペリーは徳川将軍家に招かれて北海道に渡り、鉱物資源の開発に従事したのち、中国、中央アジアへ旅した。幕末の動乱のため二ヶ月も横浜で足止めをくったりしたが、その期間に彼は観光客よろしく横浜近郊や鎌倉などを歩き、今も旅行者を魅了してやまない鎌倉の大仏なども見物したという。

アダムズとラファージの旅程が、パンペリーの足跡を辿るように鎌倉へ向ったのち、関西の美術行脚に登るべく太平洋上に航路を取るコースを辿ったのはいうまでもない。外国より来航する蒸気船は、当時有名な十種の外国品に数えられていた。すなわち、ガス燈、蒸気機関車、馬車、写真機、電報、避雷針、新聞、学校、ポスト、蒸気船といった工合であった。

東日本には不動明王の信仰、西日本には観音信仰が強い。鎌倉は東西の橋渡しをずる仲介項的などところがある。アダムズが商取引をした古美術商の山中にしても、日本旅行の事前に面倒を見てくれた駐米日本公使の九鬼にしても関西人だが、関東人岡倉天心とともにフェノロサと交じわった関西人狩野芳崖が最後に悲母観音を描いたのは象徴的である。鎌倉にある大仏は阿弥陀仏だが、京都に対する王朝コンプレックスが招いた産物ともいえるもので、実際は観音信仰に近い。維新の神仏分離以後永く不毛の地であった仏教美術の領野に、フェノロサや岡倉とともに、アダムズやラファ



ージが仲間入りしているのを知るのである。二人は日本を論じた絵入本を刊行する意志をもっていたが、これは実現を見ずに了った。それにしても、後年亡妻の供養碑を「観音」とよび慣らわしていたアダムズは、時移って耽美的センチメンタリズムにのめりこんでいたのであろうか。

日本——この未知なるものへのアダムズの探究は続く。この Discover Japan の系譜に連らなる異人の記録を人はどう見るか。日本旅行すなわち気分の変換という気の利いた観測もできようが、アダムズの世界回路にはたらいているのは感覚を一挙に総動員させる強力な電圧であるから、気分の変換というなら、その感覚の位相を指摘しなければならない。

関東においてアダムズは淫靡さを探究するという密かな楽しみを隠し持ち、石や木の性神像に出会っている。彼がたとえ多少厄介払い気味に性風俗を扱ったとしても、彼のエロスへの傾きがある罪責感とともに浮上したことは確かである。彼は関東の森林にみられる性的な歪みについて、ジョン・ヘイに宛てて矢つぎばやの手紙をしたためる。性（生・エロス）という形態が、また死（タナトス）という形態をかすめ取るものであることは、ここでフロイトを追認すれば足りよう。死という絶対の相を導入しながらアダムズは死の影にある秒単位の生活を告白する。礎稿に引いたところであるが、いま一度引用する——

Do not imagine that I scorn the public, as you say. Twenty years ago, I would have been glad to please it. Today, and for more than a year past, I have been and am living with not a thought but from minute to minute ; and the public is as far away from me... —(5)

彼が羞恥の故に語り切れなかった妻の事件後の生活の消息が裸体の神像の群立する関東の森の暗い絶対の相のもとに浮彫りされている。ついでに

いえば、文中に語られている大衆像も重大である。旅行中、彼が京都にいた時である、暑さをいとわず彼がバタフライ・ダンスとよぶ行事に熱中する時期がある。町の衆が人垣の内側をめぐりながら、蝶の恰好をして踊りたける風景に彼は感動した。浴衣こそ着ていないが、アダムズの心中に舞いの群衆の一人となりたい衝迫があったことを暗示するものである。旅行を通じて三千ドルを越える日本土産を買い上げながら、独り楽しみぬアダムズは、妻を葬ったワシントンの墓前でも、彼の心中に羽ばたく蝶を期待していたのである。

日光ではフェノロサ家の食客となっていたアダムズとラファージは、コレラの微弱化にともない関西旅行を敢行する。食事についていえば、水質に関係あるのか、日本米や日本茶の使用は避け、アダムズ一行は香辛料入りの調理を試みたようである。日本の油脂類に混入している嗅気は日本文化の腐蝕を想わせた。九月上旬に京都入りを果し、中旬に横浜へ向けて東海道中が開始される。従って関西旅行の正味は十日余りである。

To John Hay

Kioto, 9 September, 1886

Kioto at last! La Farge and I made an impressive entry at nine o' lock last night, with our suite, by moonlight, and this morning — at half past six o'clock — we were sitting on our verandah, lookig out over the big city ... —(6)

比喩的な意味も含めていえば、ベランダから「大都市」を俯瞰するという構図は、彼の精神の隈取を表現する一種の歪みである。彼の本心は京都を新エルサレムに喩える心理中に明らかである。ユダヤ人に必ずしも友好的でないアダムズであってみれば、わけても仏教くさい京都を「大都市」とよび、「新エルサレム」と賞揚したとしても、一抹のオーロラのような

歪みが残るのである。—(7)

この歪みを視覚的に表現するなら——斜塔や螺旋段階や片屋根や山脈の稜線などがすぐに想起される。すなわちシンメトリの破綻である。彼が新エルサレムとして京都を規定したとき、高みと深みに均齋をもたらす古典的精神の埒外にある歪みの美学を発見したのではないだろうか。

さらに見地をかえて、一群の人間集団の歪み、シンメトリの破綻と回復は舞踏の美学といってもよかろう。全身のシンメトリをつきくづす方策が舞踏なのである。種まぎと収穫のリズム、酒と性との深い快樂——これらは、わけても盆踊りという日本人の踊りの中に密接に結合して存在するものである。アダムズは歌と舞いを伴って訴えかける（そしてさらに酒と性の快樂さえ許される）芸者の宴席では退屈した。しかし、蝶の動きを模倣した町衆のダンスには、実生活のリズムを発見したのである。アダムズの横浜出港は十月十二日であった。

〔ノート〕

I 章

- (1) 『近代美術：17』（フェノロサと芳崖） 51—52ページ。
- (2) Donald Richie and Y. Harashima: Henry Adams: Letters from Japan, (Kenkyu—Sha, Tokyo) P. 9.

II 章

- (3) Ibid, P. 21.
- (4) ブルーノ・タウト『ニッポン』（森佛郎訳、明治書房、東京）45ページ

III 章

IV 章

- (5) Richie. Ibid., P. 43.

V 章

- (6) Ibid., P. 47.
- (7) 礎稿で日光を新エルサレムに比定したのは誤りにつき訂正する。